

私の研究とデザイン・アンド・ディベロップメント

芝野 松次郎

関西学院大学での35年間の職務を終えるに当たって、学生としてひたすら研究者を志した時代、そして関西学院大学で職を得てから後の、教育と研究に飽きることなく取り組んだ日々を振り返りたい。とは言っても、薄れつつある記憶を辿りながらであり、客観的には正確でないところも多々あると思う。ここでの振り返りは、今思い出すことのできる極めて主観的、断片的なものになると思う。そうした振り返りを通して、私の今に至るソーシャルワーク研究手法の形成プロセスを「デザイン・アンド・ディベロップメント」として捉え直してみたい。

1. ソーシャルワークとの出会い

中東の歴史を学び、歴史家を志して大阪外国語大学（現大阪大学言語学部）ペルシャ語科に入学したのは、ちょうど半世紀前のことである。だが、「学生紛争（運動）」のためにまともに学ぶことができたのは1年生の時だけであった。大阪上本町八丁目にあった外大キャンパスは、民青派によって長期間バリケード封鎖された。当初は近辺の施設を借り上げ授業が行われていたが、やがてそれもできなくなってしまった。言語を習得し歴史を学ぶ夢は、呆気なく潰えてしまったのである。学生運動に関わった多くの学生が、大学や社会の改革を主張し、挫折を味わったが、それとは違う意味で、私も人生最初の大きな挫折を味わうこととなった。

ただ、バリケード封鎖中も、クラブ活動は継続し、比較的熱心に活動していた。ESS（English Speaking Society）に所属していたが、そこで心理学と出会い、やがて臨床心理学に興味を持つようになった。当初、精神分析に魅了され、Sigmund Freudを読みあさったが、やがて決定論的過ぎるところに違和感を感じ始めた。そして、将来の不確定性を認め、未来に希望を託すことができる Carl Jung にのめり込んだ。日本人として初めてユング派分析家の資格を取得した河合隼雄の著作を読みあさり、研究会や講演会によく出かけた。今で言う「おっかけ」をしていたのかもしれない。

歴史研究者としてのキャリアを諦め、臨床心理学に心酔したが、外大を卒業後、より専門的に臨床心理学を学ぶために、聴講生として京都大学教育学部で1年を過ごした。ある時、河合先生から関西学院大学の武田建先生を紹介される。河合先生の仲介によってもたらされたこの偉大な恩師との出会いから、私のソーシャルワーク研究者としてのキャリアがスタートすることになった。この私にとっては衝撃的な恩師との出会いについては、『ソーシャルワーク研究』Vol.35、No.3の「我が師を語る」のコーナーで「角の取れた鬼コーチは生涯現役の師－武田建先生¹⁾」に詳述しているので、興味がおありの向きは一読願いたい。武田先生と関西学院大学社会学部でお会いした時、私は23歳であった。以来、恩師の背中を見ながら関西学院で学生として学び、教員として教壇に立ち、研究者として研究を深める中で、45年の歳月が過ぎたのである。

関西学院大学社会学研究科社会福祉専攻の修士課程では、臨床心理に近いソーシャルワークの治療的なミクロ実践を学んだ。当時臨床心理学やソーシャルワークにおいて注目されていた「行動変容（behavior modification）アプローチ（B-MOD）」を含む「行動療法」を中心に学んだ。武田先生がマネジメントされたオムニバス講義で、当時文学部におられた新浜邦夫先生、宮田洋先生、今田寛先生といった大先生方から理論を教わった。また、当時兵庫医科大学におられた久野能弘先生からは臨床を教わることができた。

関学では、こうして行動理論の応用を中心に学んだ。行動変容アプローチがソーシャルワークの中でど

のように取り上げられ、研究されているのか、そして実践の方法として現場でどう活用されているのかを明らかにすることを修士論文のテーマとした。まだ日本ではほとんど実践的な研究がなかったために、主にアメリカの関連専門学術誌に掲載された論文から行動変容アプローチを取り上げた論文を抽出し、精査することによって、ソーシャルワークにおける行動変容アプローチの応用の現状を分析した。その上で日本のソーシャルワークにこのアプローチを導入する場合の課題を検討した。この検討成果を修士論文とした。

修士論文の一部を、指導教授の武田先生とともに社会福祉学会で口頭発表した。「学会デビュー」である。発表後の質疑応答では、残念ながら、フロアからの反応はなかったが、正直なところほっとした。修士論文は、そう呼ぶにはやや気恥ずかしい資料改題的なものであったが、1976年にその一部を「ソーシャル・ワークの文献に見る行動療法 (Behavior Modification Approach)」²⁾と題して『青少年問題研究』第25号に発表した。

そのころ、ハワイ大学から武田先生の招きで関西学院に来られていた Gilfred Tanabe 先生からも行動変容アプローチの基礎となるオペラント理論とさまざま実践技法を学んだ。学びのプロセスの中で、ミシガン大学のスクール・オブ・ソーシャルワークがソーシャルワークにおける行動変容アプローチのメッカであることを知る。恩師の勧めと、Tanabe 先生の後押しがあり、ミシガン大学への留学を決意した。

2. B-MOD 三昧のミシガン大学時代

ミシガン大学は、ミシガン州アナーバー市にある。市の人口の半分は学生で、文字通りの大学町である。当時は夜中まで図書館で勉強した後、歩いて帰宅できるほど安全な町であった。2年の時、同級生3人と一緒に一軒家を借りて住んでいたが、外出時に鍵をかけた記憶がない。UGLi (under graduate library の略) という愛称で親しまれていた学部生用図書館で夜中まで勉強することが多かった。キャレルと呼ばれる個室で、授業の予習と復習に明け暮れた毎日だったのを思い出す。大きな図書館であったが古くて決してきれいとは言えなかったので、愛称には“ugly”という意味もあったが、私にとっては長時間を過ごした生活の場であった。

私が入学した年、ミシガン大学のスクール・オブ・ソーシャルワークでは、新しい試みとして「コンセントレーション」を設けることになった。それまでミシガンのソーシャルワークには、ミクロ（対人援助）とメゾ・マクロ（コミュニティ、行政、政策）という大きな分類があり、さらに学校、病院、家族といった領域の区分があった。しかし、専門性をさらに高め、実践で役立つ知識と技術を身につけさせるために「コンセントレーション」が考え出されたようだ。私は「行動療法コンセントレーション (behavioral concentration)」に所属した。私の留学目的を察知して、それに合わせてくれたかのようで、驚くこと頻りであった。ミクロレベルの行動変容アプローチを担当する教授陣は充実しており、Edwin Thomas や Robert Carter といった著名な研究者が名を連ねていた。そうした教授陣の講義と連動して、週2日、3セメスターの実習が用意されていた。1年目は、ジェネラル・モーターズの工場で働く労働者が多く住むフリント市にあるファミリー・サービス・エージェンシーに配属され、2年目は、デトロイト市サウスフィールドにある児童センターのサテライトに配属された。

フリント市のファミリー・サービス・エージェンシーは、Thomas 先生たちがエージェンシーのスタッフと一緒に PAMBOS (Procedure for the Assessment and Modification of Behavior in an Open Setting) という実践手続きを開発した場所である。B-MOD を家族支援に用いたもので、今日では当たり前の考え方が、計画的なアセスメント、援助プランの決定・実施、評価という一連の手続きを明確にし、マニュアル化した画期的なものであった。このエージェンシーでは、子どもの養育に困難を抱える家族を支援していたが、ソーシャルワーカーが B-MOD を用いて家族を直接支援するのではなく、家庭訪問してホームメーカーサービス（家事支援）を提供しているホームメーカーに B-MOD を教育訓練し、家庭訪問時にホーム

メーカーが親を支援する方法を用いていた。Thomas 先生はこれを “instigation” と呼び、遠隔操作的な仕方、B-MOD を普及、定着させる低コストの方法を提唱していた。この方法は、私の博士論文に影響を与えることになったのだが、この時は、実習の現場に慣れることに精一杯で、この方法の重要性がまだよく理解できていなかった。

児童センターのサウスフィールド・サテライトでは、B-MOD を活用した親子関係の調整に明け暮れる毎日であった。スーパーバイザーの Carol Murray はミシガン大学出身で、私が少し環境に慣れてくると、私の思いをしっかりと受け止め、思うようにケース援助をさせてくれ、しっかりとバックアップもしてくれた。スーパービジョンの管理的機能はほどほどに、支持的、教育的機能を重んじたすばらしいスーパーバイザーであったと今でも感謝している。この頃持った事例の一部は、帰国後の 1986 年に、武田建・荒川義子編『臨床ケースワーク』（川島書店）の「課題中心ケースワーク」³⁾の中で事例として紹介した。今思うと、ミシガン大学時代の実習は、B-MOD 三昧の充実した実習であった。

ミシガン大学での 2 年目に武田先生が「フルブライト」でミシガン大学に来られた。まる 1 年間武田先生とともに過ごせたことは私にとってはたいへん大きな意味があった。ファカルティとしてミシガンに来られたのだが、まるで学生のように勉強と研究に打ち込まれたのには驚いた。この恩師の姿勢が私にとって大きな刺激になったと思う。それがあって、その後の 5 年に及ぶ留学生生活を全うすることができたと思う。

3. 実践と効果測定の研究に邁進：シカゴ大学時代

ミシガン大学での 2 年目、比較的早い時期に博士課程への進学を決意した。留学前にはアメリカで B-MOD を学び、実践資格の MSW (master of social work) を取得すれば十分だと思っていた。正直なところ研究者の資格である Ph.D. (doctor of philosophy) を取ることは考えてはいなかった。だが、入学当初は授業と実習以外はほとんど図書館にこもって猛勉強しても B+ の成績が、1 年トータルで、実習も含め A レンジになったこと。PAMBOS のような成果を生み出す「実践的・開発的研究」というものに興味を抱いたことなどが、進学を決意させたのかもしれない。

ミシガン大学の博士課程を第 1 志望とし、第 2 志望は友人の勧めもあってシカゴ大学のスクール・オブ・ソーシャルサービスアドミニストレーション (SSA) にした。ミシガン大学での 2 年目は、進学準備のために GRE (大学院入学基礎学力試験) などを受け、願書作成にけっこう時間を要した。結果は、ミシガン大学からの合格通知が早く来た。ミシガンはダブルメジャーなので、ソーシャルワークと社会学を専攻することにした。武田先生もよくご存じの Paul Glasser 先生がアドバイザーに決まった。しかし、運命は時にいたずらをするものである。Glasser 先生が突然ミシガンを去り、テキサス大学に移ることになったのである。それにとまってアドバイザーも変更された。憧れの Thomas 先生がアドバイザーになった。一見運命は味方してくれたかのように思えた。しかし、周りの同僚や先輩からは、Thomas 先生はすばらしいが、あまりに完璧主義なので、学位を取るのに 10 年はかかるよと言われた。さすがに 10 年は長すぎると思い途方に暮れた。そんな時、忘れていたシカゴ大学から合格通知が来たのである。

迷い始めていた時であったので、すぐにシカゴ大学の B-MOD 研究者を調べた。家族支援の B-MOD で有名な Elsie Pinkston や、課題中心ケースワークの開発者として高名な William Reid などが SSA にいた。大学には、ラディカルな行動主義を代表する理論家の Israel Goldiamond がいることを知った。友人の誘いもあって、早速会いに出かけたのである。アナーバー駅からシカゴ中央駅まで、アムトラックの旅は予想に反して快適で、新たな出会いを予感してか、やや興奮していたことを思い出す。

シカゴ大学は、私立大学で、東部のアイビーリーグ大学がファーストウェーブだとすると、1800 年代中期から後期にかけて設立されたセカンドウェーブの大学の 1 つである。スタンフォード大学やノースウエスタン大学、MIT、Caltec など、セカンドウェーブの大学は、急速に発展し、全米の教育研究をリード

する存在となった。シカゴ大学は、経済学や社会学などでは「シカゴ学派」と呼ばれる特徴的な研究で有名であることは言わずもがなであろう。キャンパスは、シカゴ市南部のハイドパークと呼ばれる地域にある。大学の中心、クアドラングルには、グレーのライムストーンでできた威厳あるゴシック様式の建築群がずらりと並ぶ。ミシガン大学の比較的モダンなキャンパスしか知らない私は、これぞ大学というキャンパスから受ける、ある種の荘厳さに圧倒されてしまった。まったくのアポなしだったために、会えたのは偶然研究室におられた Pinkston 先生だけであったが、この出会いが私の人生を大きく変え、その後の人生を決定づけたのである。

(1) Pinkston 研究室と仲間たち

Elsie Pinkston 先生とは、それほど長くしゃべった訳ではなかったが、不思議なことに研究室を出る時には、リサーチ・アシスタントの職を得ていた。Pinkston マジックとでも言おうか、この人のもとで研究をしたいと思ってしまった。ミシガンに戻り、恐る恐る Thomas 先生にこのことを話したところ、Pinkston と Reid の下であれば、ミシガンと同等の研究環境が得られるので頑張りなさい、とあっさりシカゴ行きが許可が出た。武田先生からも許可をいただき、シカゴ大学での生活が始まることとなった。

当時の Pinkston 研究室には、多くの院生が所属しており、それに卒業生や他大学の研究者が加わって、SSA ではもっとも活気のある研究室だったと思う。不定期だが頻繁に開かれる論文のクリティーク会では、話題の論文を取り上げ、活発な議論がなされた。修士課程の学生も黙っておらず、積極的に議論に加わった。博士課程の学生や先生もそれに刺激を受け、議論がどんどん展開していった。時には、研究室から先生のお宅へ場所を移し、議論が続いたのを思い出す。こうした研究室での議論や、その「予習復習」を通して、ミシガン大学で学んだ B-MOD の実践を研究者の目で捉え、掘り下げることができた。その中から博士論文に繋がる独自の研究テーマを見出すことができたのである。当時の仲間たちとの研究成果はいろいろな形で継続的に公開したが、中でも印象に残っているのは、Goldiamond 教授の理論を応用し、同僚の Tina Rzepnicki (昨年まで SSA 副研究科長) と一緒に吃音を修正するプログラムを開発し、ロシア移民の男児を対象として効果を検証した論文である。これは 1984 年に Jossey-Bass から出版された Pinkston 先生ら編集の *Effective Social Work Practice* に掲載された “Treating Stuttering by Using Parental Attention and a Structured Program for Fluency.”⁴⁾ である。

博士論文の研究テーマは、Pinkston 研究室で開発した B-MOD を用いた「シングルペアレント子育て支援パッケージ」の効果を維持するためのプログラムを研究開発することであった。タイトルは “Development and Evaluation of a Program of Maximizing Maintenance of Effects with Single Parents.”⁵⁾ である。効果の汎化、維持 (generalization, maintenance) に関しては、シカゴ大学の先輩で当時カンザス大学教授であった Baer 先生と Stokes の有名な研究があった⁶⁾。彼らは、援助によって変化した行動を意図的に維持、汎化せず、援助後は神に祈るだけというのは専門的援助とは言い難い。計画的な維持の手続きを開発する必要があると訴えたのである。私の博論はまさにこの計画的な手続きを開発する試みであった。詳細は述べないが、Pinkston 先生や同僚と議論を踏まえながら、独自性のある効果維持プログラムの叩き台を作成した。それを、ユダヤ系のコミュニティーに住む人たちの協力を得て実施し、「シングルケースデザイン (単一事例実験計画法)」を用いて評価した。データの収集と、instigation による一部援助の実施では修士課程の学生たちが協力してくれた。データ収集のトレーニングや、データの信頼性を高めるセッションにもよく協力してくれた。Pinkston 研究室の仲間たちの協力があって博論を仕上げることができた。

こうして博論のための理論研究、調査の実施、データ収集は順調に進んだのであるが、収集されたデータの分析方法にも独自性が要求され、苦勞することとなる。シングルケースデザインが生み出す臨床時系列データの分析は、目で見て判断する所謂「視認 (eyeballing) 法」が一般的で、あまり科学的とは言えなかった。そこで、箔を付けようとする研究者の中には少し気取った言い方で “inter-ocular traumatic test” と呼ぶ者もいたが、いずれにしても時系列データの変化は目で捉えるだけでよいと考える実践家や研究者

が多かったのである。そこで、経済学や経営学などで研究されていた時系列データの統計学的分析方法の導入を試みることにした。

(2) Marsh 先生との協働：統計学的手法による臨床時系列データ分析の試み

Jean Marsh 先生はミシガン大学でソーシャルワークと心理学の Ph.D. を取得し、私がシカゴ大学に入学したのとほぼ同じ年に、SSA に着任した最も若い教員であった。後に SSA のディーン（研究科長）を 2 期 10 年に亘り務められることになることは、当時想像もしなかった。統計学と調査法を担当されていて、B-MOD にも精通されていた。シングルケースデザインがもたらす臨床時系列データを分析する統計学的手法に興味を抱き始めておられた。その頃、シングルケースデザインの最も単純な AB デザイン（処遇をしないベースラインと処遇をするインターベンションのみのデザイン）が生み出すデータ（中断時系列データ：interrupted time series data と呼ばれる）の分析方法として、一部の研究者は一元配置の分散分析（one-way ANOVA）を用いていた。しかし、臨床中断時系列データは時間に依存しており、統計学的独立性が担保されないデータに分散分析を用いるのは重大なルール違反であることが指摘されていた。私は、時間への依存性（serial dependency）を取り除き、処遇のありなしという $[0, 1]$ のダミー変数を独立変数として投入する重回帰分析（multiple regression analysis）を用いることができないだろうかと考えていた。Marsh 先生にこのことを話すと、たいへん興味を持たれ、「統計学的時系列分析手法を人の行動データの分析に応用する研究」ということで、一緒に IDMHDD（Illinois Department of Mental Health and Developmental Disabilities）のグラント（科学研究費）に応募しようということになったのである。「科研デビュー」である。ラッキーにも科研はすんなりとパスした（grant #8248-11）。とは言っても、研究の妥当性、独自性、先進性、波及効果などを示す諸々の膨大な証拠書類を準備し、ベテラン秘書の協力を得て正式な形に整え、やっと申請書類の発送に漕ぎ着けたことを思い出す。

時系列分析は、George Box と Gwilym Jenkins や George Tiao の研究成果によって飛躍的に進歩したが、まずは彼らの業績を本格的に研究することにした⁷⁾。経済学部とビジネススクールの時系列分析に係る授業を片っ端から受講した。必要な数学も学び直した。理論やアルゴリズムの授業は、難しく何度も挫折しかけたが、当時たくさんの日本人が企業や政府、日本銀行から派遣されていて、その人たちと一緒に苦労しながら学ぶことが励みとなって挫折を免れた。余談になるが、その時、時系列分析の授業で、いつも顔を合わせる日本人がいた。熱心にノートを取り、真剣に学ぶ姿勢が印象的な方だったが、日本銀行から来ていた翁邦雄さんだった。Ph.D. 取得後、日銀に戻り、後に日本銀行金融研究所長となった。京都大学の公共政策大学院教授となり、今は法政大学大学院政策創造研究科特任教授である。

私がかつとも興味を持ったのは、Box-Jenkins の応用の部分であった。ビジネススクール教授の Harry Roberts 先生は、コンピュータを用いた株価の時系列分析でよく知られていた。Roberts 先生たちが開発した IDA（interactive data analysis）という対話型（時系列）データ分析プログラムを用いて株価の分析とフォーキャスティング（予測）を瞬時に行い、結果をグラフ化し、それに基づいて修正を加えながら、分析を繰り返すこと（イテレーション）によってフォーキャストの質を高めていく手法は、人の行動分析にも応用できる可能性を秘めていた。

厳密な理論やアルゴリズムについての説明は避けるが、専門家からの批判を怖れず、極簡単に言うと、株価などの時系列データは、“deterministic component”（政策変更や新たな政策の導入など、予測できない誤差に依存しないパラメータ）と“stochastic component”（観察されない誤差で、確率的で断定しにくい影響があり、予測を難しくする要素）から構成されていると考えることができる。後者には、時系列の特性である時間の依存性や過去からの全体的なインパクトが考えられる。Stochastic な要素は、ある時点（例えば今日）までの時系列を従属変数とし、今より前の時点（例えば昨日）までの時系列を独立変数として回帰分析（regression analysis）する AR（auto-regression：自己回帰）モデルと、複数日のデータの平均を時系列とした MA（moving average：移動平均）を独立変数とするモデルによって取り除くことがで

き、その残差 (residuals) は、deterministic な要素がなければホワイトノイズ (これ以上何ら特徴を取り出せない状態) になると考えられる。人の行動の臨床中断時系列データについても同様に考えると、ARMA モデルによって、時間的依存性や過去からのインパクトを取り除くとホワイトノイズになるはずだが、そこにもっとも単純なシングルケースの AB デザインによる援助変数をダミー変数 (ベースライン=0、インターベンション=1) として投入することによって、処遇効果を検定できると考えたのである。

Marsh 先生や Roberts 先生からも助言を受け、取り組みを進めたが、結論から言うと ARMA モデルの活用は難しいことがわかった。ここで詳細な説明はできないが、ARMA モデルに援助効果の変数を組み込むようとすると、より高度な ARIMA モデル (I は integrated) を用いなければならなかったが、臨床時系列データは、継続的な観察コストが高く、データポイント数が少ないために高度な分析方法を用いることができなかった。そこで、完璧とは言えないが、AR に援助のダミー変数を加えた重回帰モデルを用いることにした。回帰指数のエスティメーションには前提条件をリラックスしやすい OLS (Ordinary Least Squares) を用いた。まずは、学術誌に掲載された臨床的実証論文からシングルケースデザインを用いている論文を選び、多数の臨床時系列データを抽出した。個々の時系列のベースラインデータに AR を当て嵌め、モデルを特定した上で、援助のダミー変数を加え、インターベンションデータも加えて効果測定を試み、有効な方法であることを確かめることができたのである。余談ではあるが、この研究の結果、臨床のベースラインデータはほとんど AR (1) という単純なモデルで捉え得ることがわかった。これは、面白いことに、「ランダムウォーク」する株価とよく似ていた。

こうした臨床時系列データ分析の成果の一部を、まずは 1981 年デトロイト市で開催された ABA (Applied Behavior Analysis) 学会年次大会のポスターセッションで発表した。“Time Series Analysis as a Supplement to Visual Analysis” という控えめなタイトルを付けて発表したが、思いがけず “Outstanding Poster Award” を受賞した。同大会では Marsh 先生と一緒に臨床時系列データ分析のワークショップも開催したが、予想以上に受講者が多く、翌年のウィスコンシン州ミルウォーキー市での大会でもワークショップを実施した。これらをまとめ、IDMHDD 科研費による研究成果として 1982 年、*New Directions for Program Evaluation: Application for Time Series Analysis* (Jossey-Bass) に “Visual and Statistical Analysis of Clinical Time Series Data.”⁸⁾ というタイトルの論文を投稿し、採択された。また、日本に帰国後の 1984 年には、*Social Work Research and Abstract* に “Issues in the Statistical Analysis of Clinical Time-Series Data”⁹⁾ を投稿し、採択された。さらに、1986 年に『関西学院大学社会学部紀要』に「単一事例実験計画法における評価手続き—AR モデルの臨床評価への応用」¹⁰⁾ と題した論文を発表した。博士論文では、援助によって獲得した行動を維持させるプログラムを研究開発し、この統計学的手法を用いて、その有効性を示すことができたのである。博士論文の一部は一足先に “A Single-Parent Intervention to Increase Parenting Skills over Time.”¹¹⁾ として Pinkston らが編集した *Effective Social Work Practice* (Jossey-Bass) に掲載された。

4. 関西学院での教育と研究①：社会学部時代

「デフェンス」(Dissertation Defense) と呼ばれる博士論文最終審査の口頭試問は、長時間の拷問に匹敵する圧迫面接だと先輩方から聞かされていた。現実はその時を迎えて、それが嘘ではなかったと悟った。2 時間あまりの拷問は、主査の「これで退席して結構です」という素っ気ない一言で終わった。だが、それからの 1 時間は拷問より辛い、辛抱の時間で、審査委員 6 名による合否判定を神妙に待たねばならなかった。やがて委員全員が部屋から出てきて私の側に来ると、主査が代表して結果を告げた。“Congratulations, Doctor!” シカゴ大学での 4 年半が終わった瞬間であった。シャンパンを用意して待ち受けていた Pinkston 研究室の仲間が祝杯を挙げてくれたことを忘れることはできない。

それから一月後、校章の透かし (ウォーターマーク) が入ったボンド紙に印刷した博士論文を博士論文

受理オフィスに提出し、7年間過ごしたアメリカを後にした。ラッキーなことに母校関西学院大学の社会学部で教鞭を執ることになったのである。1983年4月のことであった。

(1) 社会学部での教育と研究：開発的研究の芽生え

社会学部ではソーシャルワーク援助技術などを担当した。前任者の本出祐氏先生から引き継いだ児童相談所などの実習機関訪問も担当した。「ソーシャルワークにおける行動療法」という授業も担当したが、これは確か文学部との合併科目であったように思う。文学部本館にある大きな階段教室での授業であった。今から思うと、この授業は非常に熱心な学生が多く、授業が終わってから質問に来る学生が後を絶たなかったのを思い出す。アメリカでTA（教学補佐）していたが、日本と違い定期的に補足授業を任された。そのため、学生からの活発な質問には慣れていて、授業中に質問をする学生が多く、授業が予定通りに進まなかったのを覚えている。ところが、日本では授業中の質問はほとんどなく、おかげで授業は順調に進んだ。しかし、授業後の質問が多く、休憩時間がなくなってしまうのには閉口した。もっとも、熱心な学生は大歓迎であった。

社会学部に着任後の少なくとも5年は、アメリカでの研究成果を整理することに集中していたように思う。1986年出版の武田建・荒川義子編の『臨床ケースワーク』（川島書店）では、すでに触れたが、B-MODの手法を用いたが親子関係支援の事例を課題中心ケースワークの枠組の中で紹介した。加えて、同書では、ソーシャルワークの効果測定の方法についても「ケースワークの効果測定－臨床に必要な調査法」¹²⁾として、博士論文で取り組んだ臨床調査法のレビューの一部を紹介した。学術論文としては、1983年『大阪市社会福祉研究』第6号に「ケースワークの調査法：リサーチ・マインデッド・ワーカー」¹³⁾を投稿し、掲載された。これは、実践家としてのソーシャルワーカーも自ら調査を実施し、自己評価することによって、実践家としてより適切な意思決定ができるようになることを説いたものである。意思決定の著名な研究者である Hillel Einhorn は、最適ではない (suboptimal) 人の意思決定について研究した。彼の成果を踏まえ、ソーシャルワーカーは自ら調査し、収集した時系列データなどの実践データを統計学的に分析することなどによって、少しでも最適意思決定 (optimal decision-making) に近づこうとする努力が必要であることを、博士論文の一部を紹介する形で発表したものである。この論文で「同心会社会福祉研究奨励賞」をいただいた。その頃はご存命であった大阪市立大学名誉教授の岡村重夫先生から賞状を直接いただいたのが印象的であった。

こうした取り組みと並行して、新たな取り組みも始めた。これまでの私の研究業績は、ほとんどがソーシャルワークの援助プログラムの開発 (development) に関連していた。と言うよりも開発そのものであったと言える。したがって、私の研究手法は、従来の研究手法のように仮説を検証し、新たな知見を生み出すことだけが目的ではなかった。私の研究には、もちろん仮説を検証し、新たな知見を得ることも含まれてはいるが、むしろ、そうして得られた知見を臨床 (実践) に活かし、人が抱える問題を解決するのに有効な援助の方法 (手続き、プログラム) を作り出すこと、すなわち開発することが目的であった。研究は、研究のための研究ではなく、地域で暮らす人びとの生活をよりよくするのに役立つなければならないと常に思っていた。研究は “pragmatic” でなければならいと考えていたのである。帰国後に気付くことになったのであるが、ミシガン大学での恩師である Thomas 先生がこの領域を常にリードしていた。

Thomas 先生や、同じくミシガン大学教授の Jack Rothman は、ソーシャルワークにも「エンジニアリング」の視点が必要で、それなくしては人びとのニーズに応えうる援助プログラムを開発し、提供することはできないと主張した。エンジニアリングの視点は、人びとが問題 (ニーズ) を抱え、解決したいと望む時、計画的に問題を研究し、解決方法を作り出すために必要なのである。この解決方法を作り出すプロセスは R&D (Research and Development) と呼ばれる。彼らはソーシャルワークにエンジニアリングの視点を持ち込み、R&D によって有効な援助プログラムを開発する必要があると訴えたのである。Rothman は、そうした考え方と実践を “Social R&D”¹⁴⁾ と呼び、Thomas は “DR&U (Developmental Research and Utili-

zation)”¹⁵⁾と呼んだ。DR&Uの“U”は、開発だけではなく、開発したものを普及させ、活用されるようにする手続きを意味している。ソーシャルワークが、人びとの生活課題を理解し、その解決を通して自己実現を援助する方法として有効であるとしても、日本ではそれをわかりやすく説明することができず、社会にうまく受け入れられない状況が続いていた。その理由の1つとして、有効な援助プログラムを開発するというエンジニアリングの視点とR&Dの手続きへの関心がなかったことがあると思われた。そこで、私はソーシャルワークにおけるR&Dに本格的に取り組むことにした。1983年に、文献研究をまとめ、「ソーシャルワークにおけるR&D (Research and Development 調査開発)」¹⁶⁾と題したレビュー論文を『青少年問題研究』第33号に発表した。

こうした文献研究を踏まえて、実践研究に取りかかることになる。桑田繁君という院生がいた。彼は関西学院大学社会学研究科で行動理論を研究していたが、Donald Baer先生の刺激統制(stimulus control)に関する研究に関心を持っていたと記憶している。彼は私の授業によく顔を出し、熱心に聴き、授業の後には必ず質問に来た学生であった。当時、大学での教育研究の傍ら、博士論文の延長として、幼児を持つ保護者への親業訓練(parent training)プログラムの開発を複数の施設で始めていた。彼はそれに興味を示し、ありがたいことに補助を買って出てくれた。当初は講習会のようなプログラムであったが、やがて講話に加え、ロールプレーを取り入れ、複数のセッションからなる小グループ対象のプログラムを研究開発することになった。開発の手順としてThomas先生のDR&Uを用いることにした。この開発過程において、プログラムの叩き台を現場で実施するプロセスをビデオに録画し、プログラムによって親子の行動がどのように変化するかを観察し、その結果を踏まえてプログラムの修正を行うという一連の作業を、桑田君と一緒に行った。この研究の一部が桑田君の修士論文に繋がった。また、彼と共同で1990年に「ソーシャルワーク実践におけるR&Dの試み-0歳児を持つ母親に対する母子相互作用スキル指導プログラムの調査開発」¹⁷⁾と題した論文を『関西学院大学社会学部紀要』第61号に発表した。彼はその後、行動理論の研究を深め、すばらしい研究者として将来を嘱望されたが、高知大学の専任教員として着任後まもなくこの世を去った。36歳の若さであった。惜しい人材を失ったショックは私にとってたいへん大きなものであったが、学界にとっても大きな損失であった。

DR&Uによる親支援のプログラム開発は、1987年に神戸市総合児童センターが設立され、その研究開発部門において「行動療法しつけ指導」事業として開設された「親と子のふれあい講座」の中で大きく進捗する。B-MODを中軸に据え、DR&Uの手続きに沿って、計画的、発展的に親業支援(今日の「子ども・子育て支援」に含まれる)のプログラムとして展開された。現在では、「1歳半児と親のプログラム」と「3歳児と親のプログラム」は神戸市のほぼすべての地域児童館に普及され、「0歳児と親のプログラム」と「おねしょ講座」(夜尿を疑われる小学校低学年児の親と対象)は市内7箇所の特設児童館で行われている。こうした普及プロセスの一部を1993年に中川千恵美(現大阪人間科学大学教授)さんと共同で「ソーシャルワークDR&Uにおける普及(dissemination)の試み-「親と子のふれあい講座」出張講座を通して」¹⁸⁾と題する論文として『関西学院大学社会学部紀要』第67号に発表した。このふれあい講座の取り組みを理論化し、英文でまとめたものを、少し後の2004年に“Behavioral Family Treatment in Japan: Design and Development of a Parent Training Program.”¹⁹⁾としてHarold BriggsとTina Rzepnickiの編著*Using Evidence in Social Work Practice: Behavioral Perspective.* (Lyceum Books)に投稿し、掲載された。

(2) 厚生労働科学研究と社会学研究科 21世紀 COE プログラム：児童虐待対応ケースマネジメントの開発とD&D

この頃の私の研究は、実践と連動させながら、児童虐待の防止に関連するものが増えてくる。関西学院大学に着任したころから実親による子どもへの暴力がマスコミに取り上げられることが増え、法的な対応が求められていた。大阪では関西テレビが深夜に虐待の恐れで悩む親からの電話相談番組が企画されたが、電話が鳴り止まなかった。私のところにも大阪市児童相談所と関西テレビから児童虐待防止に関する問

い合わせなどがあり、幾度となく勉強会に参加したり、時にはテレビ番組に出演したりもした。1990年に関西テレビの支援を受け、全国に先駆け大阪で児童虐待電話相談活動を中心とする民間活動団体「児童虐待防止協会」を市内の某所に立ち上げた。現在も特定非営利活動法人として電話相談のみならず、セミナーや研究会、出版物などの情報提供、講師派遣などの活動を行っている。1994年に日本が所謂「子どもの権利条約」を批准したこともあって、もはや児童福祉法の運用で児童虐待に対応することが難しいとされるようになり、2000年には議員立法により「児童虐待の防止等に関する法律」ができる。これに合わせて厚労省は児童相談所の児童福祉司が適切に対応できるように「子ども虐待対応の手引き」を作成し、適切な対応の徹底を図ろうとした。私は、アメリカにおける公私の相談機関の児童虐待対応手続きを精査し、日本の児童相談所の児童福祉司がソーシャルワーカーとして児童虐待に対応し児童と保護者を援助するプロセスをケースマネジメントとして捉える必要を感じ、「児童虐待ケースマネジメントプログラム」を研究開発することにしたのである。

このころ Rothman と Thomas は、social R&D や DR&U をさらに進化させ、D&D を公にする。1994年、*Intervention Research: Design and Development for Human Services*²⁰⁾が Haworth Press から出版された。“R”から“D”への変更は、画期的であった。単なるリサーチではなく、リサーチの要素を含みながら「創造」の意味を内包する「デザイン」ということばを用いて、開発的研究の新たな創造的手法を示した。私は、そこに魅了された。しかし、完璧を求めすぎたために、D&D は極めて詳細かつ複雑なものとなってしまい、期待されたほど普及しなかったのである。そこで私は、D&D の先進的な骨格は残し、使いやすくするためのさまざま仕組みを考案し、組み込むことによって、D&D の修正を検討し始めた。まだ不完全ではあったが、多くの院生の協力を得て、修正 D&D 手続きの叩き台を用いた最初の研究開発の成果を2001年に有斐閣から出版した。『子ども虐待ケース・マネジメント・マニュアル』²¹⁾である。この紙媒体の書籍に、ICT（当時は IT と呼ばれた）を活用し、コミュニケーションを重視した対話型の実践ガイドをマニュアルの形にした CD-ROM を添付した。まだ経験の浅い児童福祉司が、書籍からケースマネジメントの理論や虐待対応の重要性を学ぶとともに、実際のケースに対応する場合や、ケースをシミュレーションしてプロセスを学ぶ場合に活用できるのがこの CD-ROM である。有斐閣はこれを最初の“digibook”として出版した。当時修士課程に在籍し、私のゼミに所属していた寺本典子さんがこの開発プロセスに参加してくれたが、東京の株式会社タンバリンプロデューサーズ（代表はゼミ卒業生の荒牧菜実）や大阪の株式会社ループのサポートを得て、Macromedia のプログラミング・ソフトを用いて作成した。膨大な時間を要したのを思い出す。これは後に寺本典子さんの修士論文にも繋がった。

D&D の修正はまだ不完全であったが、それをさらに進捗させたのが、2001年度から2003年度に亘る厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）「児童福祉専門職の児童虐待対応に関する専門性向上のためのマルチメディア教育訓練教材及び電子書式の開発的研究」²²⁾である。3年間の研究によって、D&D の修正モデルをほぼ完成できたとともに、マルチメディア教育訓練プログラムと虐待ケース対応の記録を電子書式化するプログラムは国のモデル事業となった。前者は、2002年に有斐閣から『社会福祉実践モデル開発の理論と実際－プロセティック・アプローチに基づく実践モデルのデザイン・アンド・ディベロップメント』（関西学院大学研究叢書 102 編）²³⁾として出版した。後者は、北海道、大阪府、神戸市（政令市）で実施された。

また、D&D の修正モデル化を進捗させたもう1つの要因は、「大学の構造改革の方針」に基づき文部科学省の新規事業として採択され、2003年から5年間に亘って、社会学研究科において実施された「21世紀 COE (center of excellence) プログラム」である。「人類の幸福に資する社会調査」をテーマとするこの事業の前半、サプリーダーの一人として関わることになった。COE の研究課題の1つとして、児童虐待ケースマネジメントを、子どもの権利条約の重要な理念であり価値である「子どもの最善の利益」という切り口から捉え直し、ソーシャルワーカーの質を高める「実践モデル (practice model)」を開発する研究に取り組んだ。

このプロセスの中で修正版 D&D は洗練されていった。そして、修正版 D&D の目的が、実践モデル開発と普及・定着にあることを明確化するとともに、独自に5つの構成要素からなる実践モデルの構造を明らかにし、定義づけることができた。また、ソーシャルワークの実践モデルにおいては、人の問題解決を支援し、その結果を持続させるための補綴的環境（prosthetic environment）を人の生活の中に作ることが肝要であることを指摘し、「プロセティック・アプローチ」と呼ぶことにした。さらに、ソーシャルワークは、こうした人と環境の接点（interface）に働きかえるマネジメントのプロセスであるという特徴があることも指摘し、PEIM（Person-Environment-Interface Management）がその本質の一つであるとした。子どもの最善の利益を考慮した児童虐待防止のためのケースマネジメント実践モデルは、こうした概念や手法を取り入れることによって、さらに洗練されていくことになった。

この頃から博士課程前期課程の院生が増え、後期課程へ進もうとする院生も増えたため、多くの院生がこの研究に関わることとなった。子どもの最善の利益に関する取り組みは欧米が進んでいた。ことにアメリカでは1997年「養子縁組と安全ファミリー法（Adoptions and Safe Families Act, Public Law 105-89）」が、問題を抱えながらも有効に機能しており、アメリカでの共同研究が重要となった。院生とともにアメリカでの調査も積極的に行った。これをまとめたものが「子どもの最善の利益」の証（エビデンス）を求めて—ソーシャルワークおけるリサーチとプラクティスを繋ぐ²⁴⁾であり、2005年に『先端社会研究（第2号）』に掲載された。

5. 関西学院大学での教育と研究②：人間福祉学部時代（今日に至る）

児童虐待への対応は21世紀に持ち越された大きな社会的課題であったが、今一つ憂慮される大きな課題が、今世紀に持ち越されていた。1989年の人口動態統計において、合計特殊出生率が過去最低の1.57となり、「1.57ショック」として少子化が脚光を浴びることとなった。1994年には、少子化対策として、女性の社会進出を推進しながら出産を促す施策として、文部、厚生、労働、建設4大臣合意による「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について」（「エンゼルプラン」）がスタートする。「緊急保育対策等5か年事業」によって保育所を増やすことに重点を置くこの施策は、待機児童数の急激な増加をもたらしただけで、少子化対策としての効果は限定的であった。その後、企業の子育て支援、男性の育児参加、ワークライフバランスなどを推し進めながら、社会全体で子育てを支える「次世代育成支援行動計画」が、基礎自治体を主体として実施された。さらには、より包括的な「子ども・子育て支援関連3法」が成立し、各自治体において「子ども・子育て支援」が始まった。私の研究も、すでに起こってしまった児童虐待に対処するケースマネジメントプログラムの開発から、すべての子育て家庭を地域で支援する「子ども・子育て支援」、なかんずく「利用支援事業」のためのケースマネジメントプログラムをソーシャルワーク実践モデルとしてデザイン・アンド・ディベロップする方向へとシフトしていくことになる。

社会学部から人間福祉学部への移籍を挟んで、2003年度から2012年度に亘り、文部科学省科学研究費補助事業（現日本学術振興会科学研究費助成事業）の萌芽研究や基盤研究Bに継続的に採択され、専門里親支援実践モデル²⁵⁾、児相養護施設でのファミリーソーシャルワーク（家庭支援専門相談員）実践モデル²⁶⁾、子育て支援総合コーディネート実践モデル²⁷⁾、といったケースマネジメントのための実践モデルの開発を行った。また、2006年度から2007年度は、厚生労働科学研究費補助金（政策科学総合研究事業）「IT活用による次世代育成支援行動計画推進評価と総合的コーディネートシステムに関する開発的研究」²⁸⁾も採択された。こうしてほぼ10年に亘り、家庭養護を含む子ども・子育て支援に関連するケースマネジメントプログラムの継続的な研究開発ができたのである。この時期の研究成果は、人間福祉研究科で博士号を取得した小野セレストア摩耶さん（滋慶医療科学大学院大学）と平田祐子さん（滋賀大学教育学部）と一緒に『ソーシャルワークとしての子育てコーディネート—子育てコンシェルジュのための実践モデル開発』²⁹⁾というタイトルの著書にまとめ、2013年に関西学院大学出版会より出版した。

こうして Thomas 先生の D&D を修正し、活用しやすくするさまざまな工夫を盛り込む作業も完了することとなった。修正された D&D、すなわち M-D&D (Modified D&D) の目的は、人びとのニーズに応え得る「ソーシャルワーク実践モデル (social work practice model)」をデザインし、ディベロップすることであることを明確にした。そして、実践モデルは、①実践対象の記述、②実践意義の記述、③依拠する理論の記述、④援助手続きの記述、⑤援助効果の記述という 5 つの要素 (記述) から構成されること。援助手続きの記述をさらに詳細にし、実践可能なマニュアルとしたものを「ソーシャルワーク実践マニュアル (social work practice manual)」と呼ぶこととした。加えて、ソーシャルワーク実践モデルはソーシャルワーク実践の諸理論から演繹されるとともに、具体的な実践から帰納されるものであるとし、実践理論、実践モデル、そして実践との関係を明らかにしたのである。このように明確化された構造は、Thomas 先生の D&D ではなく、M-D&D の独自性を示すものである。また、先に触れた PEIM (人と環境の接点におけるマネジメント) がソーシャルワークの本質の一側面であることを示し、M-D&D によって生み出される実践モデルは PEIM を実現するものであることを明確にした点も M-D&D の独自性であると言える。そして、今一つ、実践モデルにおける人と環境との関係は、人の現有能力を高め、未来の可能性を引き出すプロセティック関係であらねばならないとする点もまた、M-D&D の独自性であると言える。

私は、こうしたソーシャルワーク実践の体系を考えるプロセスにおいて、早くから「エビデンスに基づく実践 (EBP)」に興味を持ち、論文をいくつか発表してきた。例えば、2004 年に出版された『エビデンス・ベースト・カウンセリング：現代のエスプリ別冊』では「社会福祉における EBP」³⁰⁾について論じた。また、第 24 回日本社会福祉実践理論学会 (現ソーシャルワーク学会) 大会シンポジウム「エビデンスに基づくソーシャルワーク実践の科学科」での発題内容を加筆修正し、「エビデンスに基づくソーシャルワーク実践の科学科：EBSWP による実践の理論化と M-D&D に基づく実践モデル開発」³¹⁾と題する論文として『社会福祉実践理論研究 (現ソーシャルワーク学会誌)』第 17 号 (2008 年) に投稿した。同年は、「エビデンス・ベースト・ソーシャルワークの特質－量的分析、開発的研究の立場から」³²⁾が『ソーシャルワーク研究』Vol.34、No.1 に掲載された。さらに、2012 年の第 60 回日本社会福祉学会春季大会シンポジウムでソーシャルワークにおける EBP の課題と展望について発題したが、それを加筆、修正した「エビデンス・ベーストの社会福祉研究・実践をいかにすすめるか－実践評価の課題と展望」³³⁾が『社会福祉学』Vol.53、No.3 に掲載されている。

こうしたソーシャルワークにおける EBP、実践モデル開発方法としての M-D&D、そして両者の関連について整理すべく、2013 年度、関西学院より留学期間をいただいた。かつての同僚で、母校シカゴ大学の教務担当副研究科長 (Associate Dean) であった Rzepnicki 教授と恩師 Jeanne Marsh 教授の受け入れに応じて、丸 1 年間シカゴ大学において研究を深めることができた。定年まで 4 年を残し、35 年間の研究者としての仕事を整理し、まとめる機会を持つことができた。あつという間の 1 年間ではあったが、これほど充実した環境で締めくくりの研究ができことはたいへん幸せであり、関西学院、人間福祉学部、そしてシカゴ大学のみなさまに心より感謝を申し上げたい。成果は 2015 年に『ソーシャルワーク実践モデルの D&D－プラグマティック EBP のための M-D&D』³⁴⁾と題した著書として有斐閣より出版した。シカゴ大学での教育、研究、実践の現場での取り組みを踏まえ、ソーシャルワークにおける EBP のあり方についてかなり突っ込んだ検討ができたと思う。余談になるが、当時有斐閣アカデミア代表をされていた鹿島則雄さんが直々に編集をして下さった。実は鹿島さんは 2002 年の著書の編集もして下さった。丁寧な行き届いた編集に心より感謝申し上げたい。

まとめにかえて

研究者を目指した学生時代から関西学院大学での 35 年を振り返り、思い出すままに、研究と教育における自身の足跡を辿ってきたが、何か気の利いたことばでこれをまとめることはできそうにない。そこ

で、関西学院大学での経験で印象に残っている研究以外ことに触れ、まとめて替えたいと思う。

関西学院大学に着任した時には想像すらできなかったことだが、新たな学科と学部の設置に関わった。関西学院大学の社会福祉教育・研究は古く、1952年に文学部社会事業学科が設置された。その後、関西学院創立70周年事業の一環として、1960年に文学部から社会学部と社会事業学科が独立し、社会学部ができた。社会事業学科は、第2類、社会福祉学コースとして位置づけられた。1999年に、このコースを独立させ、学科とする構想が突然浮上する。E号館地下にある湿気のひどい小教室で、何度も会議を重ねながら設置構想を練ったことを思い出す。関西学院の創立の理念やスクールモットーであるマスターリー・フォー・サービスの精神を踏まえ、新社会福祉学科の教育・研究の理念として3つのCが生まれた。「人への思いやり」を意味する“compassion”、社会現象を包括的に捉える「幅広い視野」を意味する“comprehensiveness”、人の問題解決を援助する「高度な問題解決能力」を意味する“competence”である。社会学部長を務められた高田眞治先生とともに、土屋明生事務長、速水幸一主任の4名で、この設置構想を持って文部科学省に何度も足を運んだ。詳細は避けるが、長い茨の道程であった。設置認可が下りた時は、ほっとするとともに、もう二度とこんなことはしたくないと思ったものである。

ところが、2006年ごろから新学部の設置が囁かれる。いくつかの構想が生まれては消えたが、大学内のシーズを掘り起こし、新たな学部を作る話がどういふ訳か社会学部社会福祉学科に舞い込んで来た。学内の社会福祉学科、スポーツ科学・健康科学研究室、産業研究所をシーズとして活かすことになった。図らずも、2006年4月に新学部設置準備室の室長を命ぜられた。またもや設置構想を練り、教育理念や、カリキュラム、教員配置などの詳細を決定する作業が始まった。しかし、福祉学科の時と比べると、たくさんの教員、事務職の方たち、そして大学と学院の力強い支えがあって、申請プロセスは比較的順調に進んだ。当時私は文部科学省大学設置審議会大学設置分科会専門員科員副主査を経験した後、設置計画履行状況等調査委員会の委員をしていたこともあり、審査プロセスはある程度承知していたことも多少助けとなったかもしれない。それでも、設置認可が下りた時は本当にほっとしたのを覚えている。以来人間福祉学部では2期4年学部長を務め、この10年人間福祉学部の成長を見守ってきた。そして、今この学部を去ろうとしている。感慨無量である。人間福祉学部は若い教員の方たち（とはいってもそれ相応の年齢になっている）が新たな人間福祉学部を模索している姿を見ると頼もしく思える。10年後が楽しみである。

最後に、大学院教育に触れ、締め括りたいと思う。2002年4月に社会学研究科博士課程後期課程指導教員に任用され、2008年4月には人間福祉研究科後期課程指導教員に任用された。今日に至るまで後期課程の院生を指導してきた。否、彼らとともに研究をしてきた。20名を超える次代の研究を担う方たちとともに研究を続けてきた。そして、本年3月に18人目の課程博士（甲号）取得者を送り出すことができた。後期課程指導教授の15年間で18名のPh.D.を世に送り出すことができたのは、院生の一人ひとりが明確な目的と強い意志を持って研究に取り組み、博士論文を自ら「デザイン・アンド・ディベロップメント」したからだと思う。私はただ彼らとともに歩ませてもらっただけなのだと思う。博士号取得された方たちは、それぞれ研究者として歩み続け、ソーシャルワーク教育と研究の発展、そして次世代の研究者と専門職の育成に貢献している。また、私のゼミで修士号を取得された25名の方たち、学部を卒業され学士を取得された優に600名に及ぶ方たちが、それぞれの場で活躍してくれているかと思うと、教師冥利に尽きるというものである。

こうして研究者を目指した学生時代、そして関西学院大学での教員、研究者としての35年を振り返ると、私自身が自らの学者人生を、非力ではあるが一生懸命に、「デザイン・アンド・ディベロップメント」してきたことに気付かされる。退職後は、また違った視点から人生をデザインし、ディベロップしていくのだと考えると、楽しみである。

本文中で参照した文献

- 1) 芝野松次郎(単著)「我が師を語る(23) 角の取れた鬼コーチは生涯現役の師-武田建先生」『ソーシャルワーク

研究』 Vol.35、No.3、260-263、2009

- 2) 主要業績〔学術論文〕1を参照
- 3) 主要業績〔著書〕4を参照
- 4) 主要業績〔著書〕2を参照
- 5) 主要業績〔学術論文〕2を参照
- 6) Stokes, T. F. and Baer, D. M. "An Implicit Technology of Generalization." *Journal of Applied Behavior Analysis*. 10, 349-367, 1977
- 7) 最新の業績としては、Box, G. E. P., Jenkins, G. M. and Reinsel, G. C. *Time Series Analysis : Forecasting and Control, Fifth Edition*. John Wiley Sons Inc. : NY, 2015
- 8) 主要業績〔著書〕3を参照
- 9) 主要業績〔学術論文〕5を参照
- 10) 主要業績〔学術論文〕6を参照
- 11) 主要業績〔著書〕1を参照
- 12) 主要業績〔著書〕5を参照
- 13) 主要業績〔学術論文〕3を参照
- 14) Rothman, J. *Social R and D : Research and Development in the Human Services*. New Jersey : Prentice-Hall, 1980
- 15) Thomas, E. J. "Mousetraps, Developmental Research, and Social Work Education." *Social Service Review*, 52, 468-483, 1978
- 16) 主要業績〔学術論文〕4を参照
- 17) 主要業績〔学術論文〕8を参照
- 18) 主要業績〔学術論文〕11を参照
- 19) 主要業績〔著書〕17を参照
- 20) Rothman, J. and Thomas, E. J. *Intervention Research : Design and Development for Human Services*. New York : Hawthorth Press, 1994
- 21) 主要業績〔著書〕14を参照
- 22) 主要業績〔科学研究費〕1を参照
- 23) 主要業績〔著書〕16を参照
- 24) 主要業績〔学術論文〕26を参照
- 25) 主要業績〔科学研究費〕2を参照
- 26) 主要業績〔科学研究費〕3を参照
- 27) 主要業績〔科学研究費〕4を参照
- 28) 主要業績〔科学研究費〕5を参照
- 29) 主要業績〔著書〕24を参照
- 30) 主要業績〔学術論文〕21を参照
- 31) 主要業績〔学術論文〕34を参照
- 32) 主要業績〔学術論文〕35を参照
- 33) 主要業績〔学術論文〕38を参照
- 34) 主要業績〔著書〕25を参照